



1 大ホール／主階席およびバルコニー席が舞台を包み込む設計で、主階席／721席、バルコニー席381席を有する。ホール客席：ATS特注品  
2 バルコニー席／急傾斜の座席は舞台との距離が近くて音響もよく、常連の観客には人気がある。

1



## THE TOPICS

### 柏崎市文化会館 アルフォーレ

KASHIWAZAKI CITY PERFORMING ARTS CENTER

所在地：新潟県

設計：(株)環境デザイン研究所

## 一体感にこだわった大ホールは 芸術文化を生み出す新たな拠点。

2012年にオープンした柏崎市文化会館「アルフォーレ」は、文化創造活動の新たな中核施設である。愛称「アルフォーレ」は「芸術の森」を意味する造語で、市民に親しまれる創造活動と交流の場を提供する。旧市民会館は、老朽化などによる建て替えを検討中に2007年の「新潟県中越沖地震」で使用不能となり、早期に建設されることとなった。公募プロポーザルで選定され、設計を担当した(株)環境デザイン研究所に、基本計画をはじめ、建物や大ホールそして観覧席の特徴について話しをうかがった。



2





環境デザイン研究所 会長

仙田 満 氏

Mitsuru Senda

所長

斎藤 義 氏

Tadashi Saito

環境設計部 ゼネラルマネージャー

古藤田 茂 氏

Shigeru Kotoda

## にぎわいと交流を生む文化会館は、震災復興のシンボル。

新しい文化会館は、JR信越本線の柏崎駅北側にあった日本石油の工場跡地で再開発計画地区の一角に建っています。駅の周辺には商業施設が多く、当会館は、街の中核施設として公園と一体化した形でつくられました。

設計プロポーザルの要件は、「市民に設備が整った創作活動の場を提供し、鑑賞機会の充実や人材育成および創作活動の支援をする」「誰もが気軽に利用でき、交流やにぎわいを創出する場にする」「中越沖地震からの復興を象徴する柏崎市の新しい顔として、市民に愛され誇りに思われる施設にする」ということでした。

私たちは、市民の交流やにぎわいを創出する場として「都市廊」を提案しました。「都市廊」は屋根付き回廊で、隣接する街並みや歩道を經由して駅から続く人の流れを生み出します。また柏崎市は雪国なので、利用者が安全に建物へ出入りでき

る「雁木<sup>がんぎ</sup>空間」の役割も果たします。

さらに、いつも人がいる会館となるよう、リビング的な場として「市民ラウンジ」を設けました。ギャラリーにはさまざまな催しのポスターが貼られ、子どもやファミリーが楽しめるようなしつらいにしています。また駅前にあるので、学校帰りの学生が立ち寄って音楽を聴いたりすることもできます。次の世代を担う子どもたちが、市民会館に親しみを持ついい機会にしたいと考えたのです。

ランドマークでもあるので、駅から見える景観を大切にしました。隣接する公園や建物の前に広がる劇場広場など、豊かな緑に囲まれたレンガ色の文化会館は柏崎市の顔となるでしょう。

建物のデザインテーマは「レンガ」で、サッシまで全てレンガ色に統一されています。外観は多角形の屋根がひとつの特徴ですが、大ホールなどの内部機能がそ

のまま表出したデザインとしています。そして、南側が全面ガラス張りの建物からは、「米山」をはじめとする「刈羽三山」の景観が楽しめます。また、震災復興のシンボルとするために、高耐久の鉄骨鉄筋コンクリート造と免震構造を採用し、災害時には避難所となる機能も備えています。

※雁木：積雪期でも通行できるよう、新潟県の商店街などで見られる雪よけの屋根。

### 観客と演者が一体になれるよう、鑑賞環境を整備。

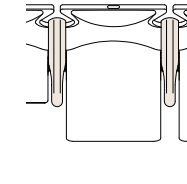
旧市民会館の大ホールは、一層構造で音響が良く、市民の方々は木を多用した魅力的なたたずまいを愛していました。その気持ちを新しい大ホールにも生かしたいと思いました。

新ホールの配置は2層構造で、うち一層はバルコニーという計画を採用してい



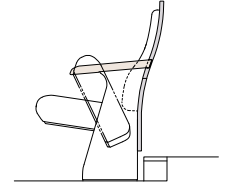
### 肘掛

断面形状を分水嶺形にすることで、隣席客とさりげなくシェアができる。また肘掛を前方に傾斜させ、自然と肩の力が抜けて落ち着けるようにした。



### 背もたれ

背裏板は座り心地の良さはもちろん、客席後部の段床から吹き上がる空気を背裏沿いに淀みなく流せる形状でもある。



### 音響性能

座裏板の開孔面積や座の跳ね上がり角度を検討し調整することで、空席時でも着席時と同等の音響性能を持たせている。

ます。そして、バルコニー席が主階席と舞台を両手の掌<sup>たなこら</sup>で包み込むような形にしました。また私たちは、演じる側と観客側が一体となって催しの内容を共有することが大事だと考えていますので、主階席の傾斜を強くして舞台が近くに感じられるようにしました。さらに観やすくなるために、中央部分の座席を千鳥配列にして前の人の頭で視線が遮られないようにし、両側の座席は千鳥配列にはせずに、視軸が舞台へ向くように座席を大きく内側に振った配列にしました。

最も気を配ったのはバルコニー席です。一般的には、クラスが下で主階席から疎外された席と取られがちですが、本当は観やすくて音もいいのです。まずバルコニー全体を思い切って急傾斜にして舞台の框<sup>かまち</sup>がよく見えるようにし、両側の座席を舞台へ向くよう内側に振りました。そしてバルコニー席をたっぷりと用意したの

です。この計画は構造上難しかったのですが、バルコニー席の良さを市民の方々に分かってほしいと考え実現させました。

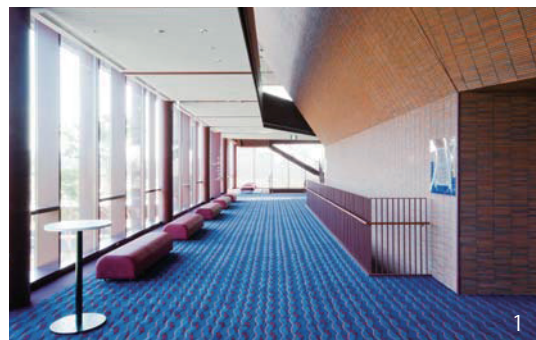
音響については、1階の中央席の響きが疎になりやすいというホール共通の問題を解決する必要がありました。対策として、舞台からの初期反射音をはじき落とす大小<sup>ひさし</sup>の「庇」を付け、タイルや木の横棧を組み合わせた「側壁」を設けて反射音が中央席へ向かうようにしました。これらの「庇」や「側壁」は、内装デザインの特徴にもなっています。

楽屋については、単なる控室ではなく、アーティストが舞台前に自分の演奏や演技を再確認したり、リフレッシュしたりする重要な空間と捉えてつくりました。外光が感じられる窓を設け、出演者たちが話し合えるラウンジも備えています。

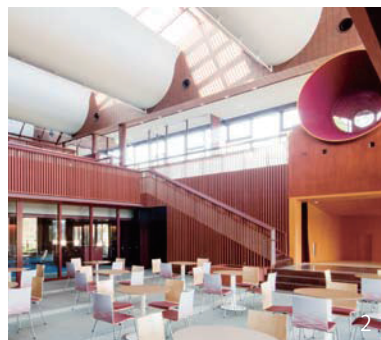
客席椅子のデザインですが、背板の一部にくびれを設けています。これは、前の

座席が壁のように立ちはだからず人の気配が繋がるようにしたいと考えたからです。このくびれは音響にもいい効果を及ぼしています。また肘掛けは、席幅に限りがあるなかで隣席との関係がいつも問題になっていますので、今回は、中央に「分水嶺<sup>みんすいりい</sup>」を設けて肘が落ち着く形や角度を探しました。何回も試作品を作つてようやくこの形に落ち着きましたが、市民の方からは好評を得ているようです。今までいろいろな客席を製作してきましたが、人を包み込む形、隣席への配慮、音響効果などからみて、アルフォーレのイスは劇場のプロトタイプの一つといえる機能とデザインを有していると思います。

このようにして造りだしたホールと文化会館を、市民の方々に大いに楽しんでいただき、「アルフォーレ」の名にふさわしい芸術の場に育ててほしいと願っています。



1



3



4

1 ホワイエ／窓からは柏崎の自然景観が一望できる。 2 市民ラウンジ／トップライトの柔らかい光が射し込み、「音の遊び場」などもある。 3 大練習室／防振・遮音機能を持つ浮構造で、音楽・演劇・舞踊の練習に利用できる。イス：ルッシュ 4 会議室／間仕切りを移動して大スペースに、また楽屋としても使えるように配慮している。イス：ルッシュ